



支那だまり

No.37 1990.7

人 — ひと 新役員紹介

関西支部「技術賞」発表

土木の視界 — 風土の眼から

学生海外派遣報告

From the outside — 「表現」としての土木

女性の目 — 2001年に向かってBACK TO THE NATURE

広報



社団法人 土木学会関西支部

人 ひと

■ 土木学会関西支部 支部長 竹内 良夫
 副支部長 松下 照夫
 副支部長 吉川 和広



左から
 吉川副支部長、松下副支部長、竹内支部長

副支部長 松下照夫

趣味は元来、勝負ごとが好きな性分で、なかでも囲碁は無二の親友。盤に向えば“流水先を争わず”を心がけたい。棋力は五段を自認したいが……。

高令化社会が急速にかつ確実に到来するなかで、若さと情熱だけは失いたくない。サムエル・ウルマン(米国の詩人、1840~1924)の青春の詩は、勇気と冒険心を与えてくれる好きな詩文である。「青春とは人生のある期間ではなく、心の持ちかたを云う。(中略)年を重ねただけでは人は老いない。理想を失うときはじめて老いる。」(以下略)

支部長 竹内良夫

戦争中はおっぱら友人達と抽象的人生観を語り合い、ボートに明け暮れた。

戦後は新潟海岸決潰の調査に始まり、港湾行政、土木計画、地域計画、発展途上国への技術協力に従事した。この間、よき師、よき先輩、よき友人に恵まれて幸せである。

胸を打つ言葉 「万象に天意を覚る者は幸いなり、人類の為国の為」(新潟県大河津分水に故青山士氏の建設した碑)

副支部長 吉川和広

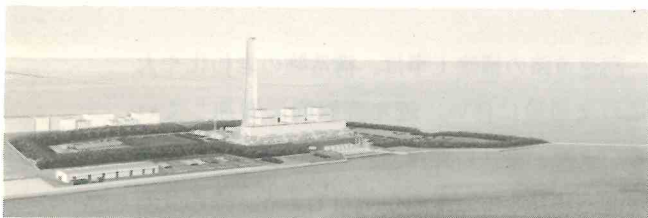
大阪ベイエリアと私

関西国際空港、明石海峡大橋、関西文化学術研究都市の三大プロジェクトの建設を契機に、385件22兆円プロジェクトが動き出し、関西はいま歴史的な転換期を迎えて大いに活気づいている。大阪ベイエリア活性化のための21世紀の総合的なグランドデザインづくりが進められている。ベイエリア国際フォーラムを企画したり、外国のベイエリア先進事例調査団に参加したり、相変らずのあわたたしい毎日を送っている。

平成元年度土木学会関西支部
技術賞(4件)

■南港発電所土木工事の設計・施工
関西電力株式会社
南港火力建設所

■大和川下流流域下水道雨水幹線の施工
大阪府南部流域下水道事務所
西松建設・アイサワ工業・大末建設 共同企業体



南港発電所は、大阪市の西南端に位置するLNG専燃火力(180万kW)である。

この附近一帯は、埋立てられて日も浅く、未だ圧密進行中の地盤であるため、設計に際しては沈下対策等の技術的諸問題について種々の検討を加え、綿密な計測による徹底した情報化施工を行った。一例として、取水口のポンプ室では、軟弱地盤上に幅66m・長さ55m・深さ12mの大規模掘削工事を行ったが、工程的に鋼管矢板タイロッド控杭式土留工を採用せざるを得なかった。そのため、矢板の変形を計測しながら深さ6mまでを掘削したところ予測値と大幅に異なる挙動を示した。この原因検討をふまえて6m~12m深さの掘削では、予測値を修正した結果、この値に概ね合致した挙動を示した。これらの考え方は、今後の類似工事にも大いに参考になるものと確信する。

また、水圧4kgf/cm²下の泥水加压式シールドトンネルでは、トンネルルート上の建物等に沈下被害を与えないような施工法を決めるため、試験施工を行い、沈下防止には泥水圧と裏込グラウトの実施時期が大きく寄与することが判明したので、これらの結果をふまえて施工し、工事を無事に完了することができた。

1.概要

狭隘な幹線道路の難条件下におけるシールド施工と、特殊二次覆工

削土密閉式シールド工法(気泡タイプ)

工事延長 950.9m

一次覆工 鋼製セグメント 外径3.8m

二次覆工 FRP-M管 内径3.2m

2.特徴

①全線にわたり土被がほとんどないに等しい過酷な施工条件下、一次覆工を高精度で事故なく無事貫通。→周到な計画と適切な施工管理をすれば難条件下でもシールド工事は安全な工法である事を実証した。

②世界最大のFRP-M管を採用。→一次覆工径を縮小させ二次覆工径を大きくとり且つ断面不足分を粗度係数の低減化で計画流量の流下を可能とした。

③施工隙間11cmの中で特殊なジャッキ、台車、レールを考案工夫し、重い大口径管を問題なく据付。→同種工事の施工限界に挑んだものであり狭い空間での他工事への応用度は大きい。

④同様な難条件で未施工となっている幹線や上下流管底高の拘束された増補幹線等限定された空間の中で計画流量を流下させる時の一手法になる。



■ 地下鉄御堂筋線梅田駅の改修工事
 大阪市交通局
 株式会社大林組

地下鉄御堂筋線梅田駅は1日乗降客が50万人もあり、日本最大の地下鉄駅で終日混雑している。そこで従来のホームを北行専用とし、この東側に南行専用ホームを増設する大改造を行なった。この工事の最大の課題は既設構造物を仮受して新設構造物を築造することにある。今回仮受杭として複合摩擦杭を技術開発した。これは超高圧噴流注入工法により粘土層内に直径2mの改良体を造成し、中央にジベル筋を溶接したH鋼杭を挿入したもので、仮受荷重は鋼杭から改良体へ、さらに基礎地盤に伝達される。施工手順を図-1に示す。

この複合摩擦杭の採用により、杭先端が粘土層内に留まり、杭造成時に被圧地下水が自噴することがない。また、仮受荷重が粘土地盤に分散されて被圧水による盤ぶくれに対する抑止力としても有効に働き、掘削時に地下水位低下工法が不要である。(図-2参照)

■ ミニウェイ(立体道路式路面補修装置)の開発
 阪神高速道路公団
 三菱重工業株式会社 神戸造船所

高速道路の補修工事は、構造物の老朽化や大量の交通量に伴い、近年直線的に増加している。また、それに伴って、補修工事による交通渋滞も頻発しているのが現状である。この交通渋滞を緩和するため、開発したのがミニウェイである。

ミニウェイの概念は、「道路上で、7つの低速自走できる装置(モジュール)を連結し、仮橋を構成する。そ



の下部空間や側方空間で多目的な路面補修工事を可能とする装置」である。

ミニウェイの特徴としては、

- ①モジュール内では伸縮継手補修等、側方の空間では高欄等の工事が実施可能で、作業に必要な資機材は全て、ミニウェイに搭載されている。
- ②ミニウェイ自体の組立・解体時以外は車線規制を必要としない。

高速道路上では、通常1車線を規制して補修工事を行うが、(片側2車線の区間であれば、交通容量が平常時の約40%まで減少)、ミニウェイを補修箇所を設置すれば、交通容量が約70%まで回復でき、交通渋滞を緩和することができる。

図-1
複合摩擦杭施工手順

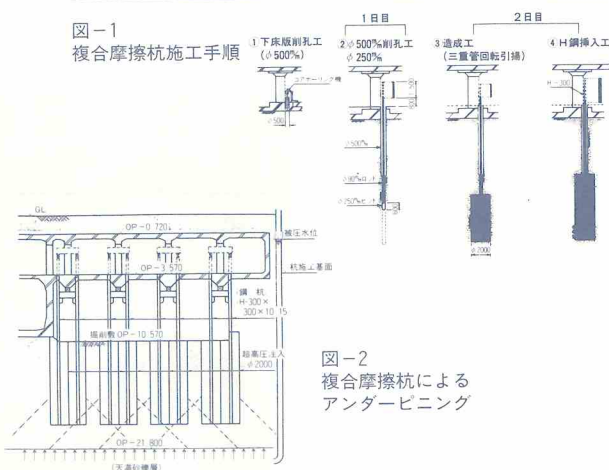


図-2
複合摩擦杭による
アンダーピニング

技術賞選考委員会

委員長 小林昭一

委員 會田 正、阿河俊夫、梅田千秋、大家康照、
奥村敏久、加藤隆夫、木村悌士、京 美夫、
桜井春輔、重光世洋、西村 昂、廣戸敏夫、
福田 護、森本隆也平成元年度技術賞選考経過について
技術賞選考委員会委員長
小林 昭一

土木学会関西支部では、昭和57年度より技術賞の制度を設置し、優れた業績を表彰してきております。授賞の対象は、計画、設計、施工等で土木技術の進展に顕著な貢献をしたもの、または、優れた特色を有する画期的な業績と認められたもので、支部会員が直接関与したものであります。

平成元年度には、9件の応募があり、技術賞選考委員会で、慎重かつ厳正に選考して、4件の授賞候補を選定しました。その選考経過を簡単に紹介します。

選考委員会は、15名の委員より構成されております。委員会は、技術賞規則、選考委員会内規、選考等に関する細則に則って選考方法、募集要項及び推薦書様式について検討し、応募について選考し、授賞候補を選定します。

本年度には、総合技術部門3件、分野別技術部門6件の応募がありました。委員会では、それらの資格を確認し、関連資料を調査した後、独創性、発展性、努力度、地域への密着度等を評価基準として、総合と分野別に分けて、投票によってまず予選通過候補を授賞数の2倍以下に絞り込むことにしました。

その結果、予選通過候補として、総合部門2件、分野別部門6件が決定されました。それらについては、3月上旬に説明会が開催され、OHP及びスライドを使用した要を得た説明がありました。一方、各委員は応募時に提出された資

料を十分に検討して説明会に臨みましたので、活発な質疑応答が行われました。

授賞候補は、選考基準に則って全委員の投票によって選定されました。選考に当たっては、1)独創性、独自性あるいは先駆性、2)汎用性、発展性、応用性あるいは他への影響度、3)努力度、困難の克服度あるいは使命感の程度、4)地域への密着度に重点を置いて評価しております。

なお、開票結果、総合部門の1件にかなり差がありましたので、その取扱について改めて全委員から意見を聴き、可否を投票により決することになりました。その結果、それは不採択となりました。

以上の経過によって、平成元年度は、総合技術部門1件、分野別技術部門3件の授賞候補を選定し、支部長に授賞理由を添付して答申しました。

受賞者には、心からお喜びを申し上げますとともに、土木技術の進展に大きく貢献されたことに対し敬意を表します。また、惜しくも選にもれた応募も、その業績と努力は大いに賞賛に値するものであります。このような優れた業績が、社会的にも高く評価されることを切望しております。

最後になりましたが、ご尽力戴きました関係各位に厚くお礼を申し上げます。

■風土の眼から
京都大学教授
佐佐木 綱

地域計画は極めて学際的分野であるが、大きく分けて2つのアプローチがある。1つは、地域科学 (regional science) からの接近であり、他の1つは、地域研究 (area studies) である。

前者は、従来の土木工学における常道でもあり、計画の原理は「最適化原理」である。たとえば、地域の所得を最大にするとか、交通の所要時間を最小にするためにはどうすればよいのか、といった形で問題を定式化するのである。このようなアプローチは計画の普遍的モデルの確立を目指すもので、その数学的きれいさも特徴の1つである。このモデルは地域を越えて普遍的に適用できるポータブルな理論である。このような理論が実際の地域に適用されてくると、どの地域も無機的要素だけで最適化され、画一的な地域計画が推進されることになる。

これに対して後者は、その地域の特徴を分析し、地域の個性化を計ることを目指すもので、前者に対して「個性化原理」が重要となる。それはポータブルなものではなく、土着的なものである。地域の持つ文化的・歴史的な有機的要素もこれに含まれる。

従来、前者による地域計画が先行していたこともあって、利便性・機能性が重視されすぎ、個性のない町が増加して、町としての魅力が失われてきた。今後、高速交通網が全国をおおうようになると、活性化のための地域間競争が一層激しくなり、誇りの持てる個性のある町づく

りが重要になってくるに違いない。まさに経済の時代から文化の時代への転換である。

この2つのアプローチの対立は、なかなか根の深いものであるが、両者の溝を埋めるものとして「風土工学」といった分野が考えられる。

風土は人間と、それをとりまく自然を含む環境との交感の上に成立している。しかしわれわれが自然との交感をどのようにして行なうかとなると難しい問題である。その交感を容易にするため次のように考えたらどうであろうか。

自分自身が持っている「心と体」について、その両者の交流の点を考えてみる。両者とも自分の中にあるのであるから、交感はやさしい。たとえば、お腹が痛いときに、手で腹を押える姿勢をとるとすれば、それは痛いと感じる心が、自分の体にそのような姿勢をとるように命じているのであって、他人はその姿勢を見ることによって、その人の腹の痛いことを察するのである。一方、体はそのような姿勢をとることによって、心のありようを表現しているともいえる。

座禅のように、ある姿勢をとることによって体が心に、心のありようを迫るという場合も多い。形から入って、心のありかたを制御するわけである。何時もにこにこしていると、心がにこやかになることも事実である。

このような心と体との交感の状態を、人間と自然との関係に拡張してみるなのである。人間を心に、自然を体に置き換えるわけである。それ



には自分自身が自然と一体となった感覚が不可欠である。自然を自分の体の一部のように感じる必要がある。そのためには、自分自身と自然との歴史的交流がなければならない。それは幼いときからの思い出であるかもしれないし、文学や音楽、あるいは魚釣りなど趣味を通して築かれたものであるかもしれない。いずれにしても、人間が自然に対して深い思い入れを行なっている必要がある。

このように、われわれ人間が自然と対峙したときに生じる交感の結果、われわれは自然に対して、ある姿勢を求めることになる。その姿勢としての「形」が、その地域の風土に適した造形ではないだろうか。

このように考えるとき、自然は単に物理的自然ではなく、歴史的・社会的な意味を持った自然となる。

和辻哲郎は人間と自然が対峙したとき、自己了解の場としての自然を風土と規定し、文化の歴史的発展の差異を風土に求めており、また精神病理学者としての木村敏は、人間の肉体はそれ自身風土であると規定した上で、風土は自然科学的、生態学的な意味での自然環境ではなく、人間と自然との生命的接触の仕方、自然との出会いの場における人間の生き方の様相としてとらえられるべきであるとしている。(木村敏

著、人と人との間、精神病理学的日本論、弘文社)

地域計画に当たって、先ず対象地域の風土分析を行い、イメージ・コンセプトを明確にした上で、それを損なわない形で、むしろ逆に、イメージを積極的に強化する方向で、土木構造物を含む都市基盤整備を行ない、個性化を計ると同時に最適化原理をも活かすことが可能ではないだろうか。

このように、自分自身と自然とが一体となった感覚は、日本人の伝統的自然観に見られるもので、土木技術の多くが地球の改変に結びつくことを考えると、土木技術者は地球の医者ともいふべき仕事をしていると考えてよい。患者を悪くするようでは情けない。従来の土木は外科的措置が多かった。整形外科から心療内科をも含む総合技術への道を進んでほしい。

弘法大師は、自然信仰と土木技術を両立させながら、農業振興を成功させた代表的な人物である。その裏には密教精神の介在が有力な鍵となったに違いない。当時は政府に陰陽局があり陰陽五行説も盛んであった。天と地が交合して基本的要素としての五行(木、火、土、金、水)を生んだとされているが、土木工学はその中の2つを含み、大地としての土は陰、木は陽であり、陰と陽の原理を生かす陰陽工学であるかもしれない。

■感動のアマゾン
明石工業高等専門学校 5年生
大豊 英則

1ヶ月かけて、地球の反対側の国ブラジルを旅行してきました。3月の当地は雨期の終り頃であり、河が増水して期待していたワニ、ヘビなどは殆んど見る事ができませんでしたが、マナオス付近で河幅15kmのアマゾン川、どこまでも広がる密林といった光景を見せつけられ、自分がアマゾンにいるという強い実感で一杯でした。

研修としては、広大な森林を水没させたサミュエルダムや、アマゾンを貫くトランスアマゾニカ（アマゾンの国道）など見学することができました。近年アマゾンでの開発事業が世界中の批判を受け、道路建設工事が完成間近でストップしているような所もありました。アマゾンの各都市は水力発電による電力とサンパウロなどブラジル南部の主要都市とを結ぶ道路を必要としており、考えさせられるところがあります。サミュエルダムは20万kW/hとブラジルでは小さな規模ですが、水没地はとてつもなく広大です。その面積や貯水量を尋ねると、よくわからないとの返事でした。

飛行機でブラジル国内9ヶ所をかけあしでまわりましたが、まだ行きたい地方があるのと1ヶ所にもっと長く滞在したかったのとで、物足りないわがままな気持ちが帰国後の悩みです。

ブラジルでお世話になったマナオス日本総領事館の近藤氏、日本大使館の高橋氏をはじめ、たくさんの日本人、ブラジル人の皆さんに大変感謝しています。

サミュエルダムのスルース・ゲート



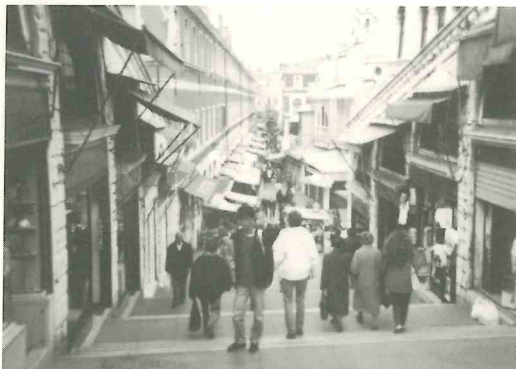
道路事情の一例

仕組まれたパズルの街—ヴェネツィア ■
 京都大学 3回生
 北野 利一

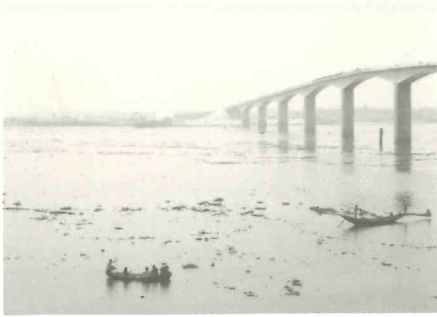
僕のイタリア旅行の目的は、「広場という日本にはない空間が、街に対し実際にどのような役割を果たしているのか」ということを見聞してることだった。実際行って見て、一番気に入った街はヴェネツィアである。ヴェネツィア、世界の一級観光地である。この街を、僕は初め好きになれなかった。つまり、大変保守的で、大運河に面した建物は改築できず、永遠に、ただ昔の形を残しつつけるだけという点が、前衛の好きな僕には理解できなかった。しかし、ヴェネツィア大学建築の友人ができ、一週間滞在し、島全体すみずみまで歩き、大学図書館で調べるにより、迷路のように交錯するヴェネツィアの通路と運河が、広場と一体となつてつくる有機的な構造が、まるで、うまく仕組まれたパズルが解けた時の感じのように、カチンと、僕の頭の中で、明らかになったような気がした。確かに、フィレンツェ、ローマ、ナポリ等、他

の街にも、僕の理想とするいい広場はあったが、単なる駐車場と化し、僕を幻滅させるものも多くあった。その点、車の入場できないヴェネツィアは、そこに住む人々が集まり、会話を楽しみ、落ちついて休息のできる、僕の理想とする、温かい広場ばかりがあった。僕はヴェネツィアの住人を羨ましく思う。そして、日本の、特に歴史の深い京都の、土木的見地からの伝統について、考えさせられる。今回、その伝統の良さを感じることができ、また、イタリア語が上達し、たくさんのイタリアの友達ができ、いい旅行ができてうれしく思います。イタリアへの機会を与えてもらえて本当にありがとうございました。

VENEZIA リアルト橋



VENEZIA



バングラディッシュ メグナ川
右の橋は建設中のメグナ橋

『ガンジス河流域の治水・利水対策と現住民の生活を見学すること』これが旅の目的である。できる限り現地人と同じ交通機関を利用し、同じ物を食べ、同じ所で暮らす。日本の慣習を捨て、“郷に入っては郷に従う” 純粋な旅人になろうと努力した。苦労を覚悟で、価値ある体験を得ようと、アジアの発展途上国へ旅立った。

3月初旬、日本を出国した。バングラディッシュに20日間、ネパールに25日間、インドに20日間、行き帰りに立ち寄ったタイ・韓国を含めると、全行程2ヶ月半もの長期に及んだ。

《バングラディッシュ》…ここではダッカ周辺の盛土やコンクリート壁による洪水対策の他、スラム街や商店街、オフィス街、駅、港など様々な所を見学できた。^{*}BUETで土木を専攻している学生と語り合うこともできた。また、ベンガル湾からメグナ川を遡る舟旅では、河口の低平な堆積島やそこで農耕を行う人々、小舟の中を生活の場とする“river-gypsy”など、ガンジス河口に広がる秘境を見た。

《ネパール》…ガンジス河の支流がヒマラヤ山脈の奥へ奥へと続いている。主に山の人々の暮らしを見学しに行った。谷の両側は切立った崖。小さな集落が山々の間に点々と存在する。未だに電気・水道設備のない村が多い。チョムロン村に立ち寄った。ここは日本人ボランティアが水力発電を用いて村全戸に灯をともしたこと^{あかり}で有名な所である。カトマンズで民主化要求運動

■ 秘境ガンジス流域の旅
大阪大学大学院修士 1年
湯浅 楠勝

が激しくなっていた折、山に住む人々は普段と変わらず、段々畑でのんびり仕事をしていた。《インド》…ガンジス河は雨期を前にして干からびきっていた。規模は大阪の淀川とたいして変わらないように思う。しかし、川辺には、沐浴、洗濯、夕涼みと、人々が絶え間なく集まる独特の水際文化があった。ちなみに僕自身は、インドでは、発熱・下痢との闘いであった。

なお、この研修旅行中、(株)大林組のご協力でタイのバンナラ水門、バングラディッシュのメグナ橋建設現場を見学することができた。海外で活躍されている先輩方の姿を見ることができ、同じ土木技術者を志す者として貴重な体験になったと思う。

最後に、色々とお世話して下さった諸先輩の皆様方、どうも有難うございました。

^{*}BUET=BANGLADESH UNIVERSITY OF
ENGINEERING & TECHNOLOGY

ネパール
山の子供達



インド ペナレス
川辺で洗濯をする人々



2001年に向かってBACK TO THE NATURE ■

イテノセ・ルイザ・ヒロコ
春本鐵工所 設計技術部技術開発課

平成2年、西暦1990年。日本では、昭和から平成へと時代が変わり、西洋でもあと10年で21世紀へと、新しい時代を迎えようとしている。新世紀への最後のダッシュとも言えるのでしょうか。

中国の天安門事件、米ソ間の緊張緩和、ソ連のペレストロイカが進み、これに関連して社会主義諸国において、民主化要求が顕著になり、欧米中心の経済も変わる傾向を示している。世界的に様々な変化が、いろんな形で、新しい時の風を感じさせている。人類の歴史の中でも、今ほど変化が早く、激しく展開した時代はなかったでしょう。これほど世界中の人々が「時代GAP」(GENERATION GAPより大きいGAP)を経験したことはなかったでしょう。最先端技術の利便を経験している人達がいれば、中世並の生活をしている人々もまだいるのです。

S Fの世界を連想させる2001年が近付くといえ、それに関連する最も一般的なイメージは、宇宙開発のイメージであると思います。しかし、手の届かない宇宙より、身近な空間をより有効に利用することが重要で現実的なのではないのでしょうか。地下や海洋・海中空間を開発する技術も、既にあるとはいえ、この地球には、まだまだ、すること、出来ることが数えきれないほど残されている様な気がします。

地球上で環境に最も大きな影響を与える環境要素としての人間が自然を守り、その自然と共



により豊かな生活が出来るようにすることが技術者の役割ではないかと思います。人間が人間のために働くことは、当然なことではないのでしょうか。ですから、地球離れするより、地球へ、自然へ、ROOTSへ戻ることも一つのモットーであると、私自身は考えます。土木工学もルーツへ戻り、単なる工学(工:物を作る)ではなく、ENGINEERING「ラテン語のINGENIAREから、発明、設計、計画する」の意味で考え直す必要があるのではないかと、最近よく考えます。

西暦2001年頃には私達の世代が社会的に最も活動できる時期に当たるだろうと思いつつ、今世紀末のTRENDY WORDSの中の二つ、国際化と女性化に当てはまると私自身がいわれていますが、21世紀はこれらの言葉を越えた「人間化」の時代になって欲しいと期待しています。

本来、NATURAL SCIENCEの一種である土木工学が、地球へ、自然へ戻る(BACK TO MOTHER NATURE)ことにも矛盾がないと思うのですが……。

■「表現」としての土木
講談社科学図書出版部長
末武 親一郎

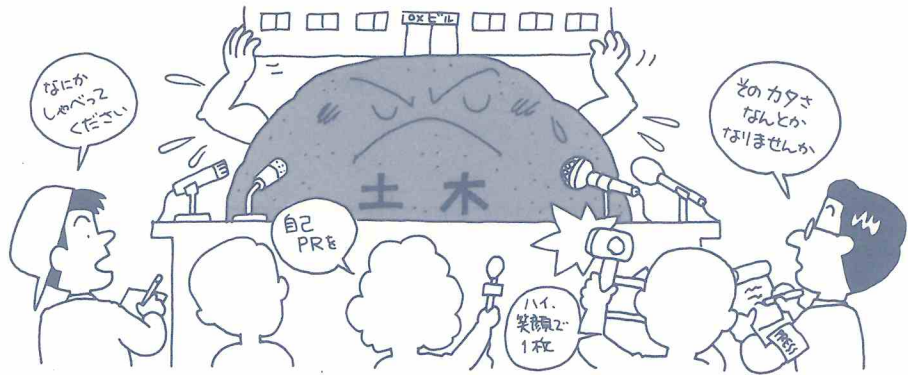
私が土木のドの字を知ったのは一昨年のこと。「水のなんでも小事典」（土木学会関西支部編）の刊行に係わったのが機縁であった。「へえー、土木って橋も作るんですか！」なんてトンチンカンなことを、土木の先生の前で思わず言ってしまったものだ。どだい、その程度の知識で、よくも編集者がつとまるものだと思われるかもしれないが、寡黙な人の故事来歴は知りようがないのと同じことだ。

昔は「縁の下の力持ち」とか言われて、人に知られずに大切な仕事を黙々とするのが美德とされた時代もあった。今そんなことを、たとえば若い人たちに向かって言っても、はたして何人が納得してくれるだろうか？

私の住んでいる家の近くで、数年前から橋梁工事がすすんでいる。その橋が完成すれば、自宅前の道路も少しは車の量が減るのではないかと思っているので、休みの日などときどき、工事現場をのぞきに行く。その大きな鉄の骨組みは、アリのほうのように遅々と、また黙々と寸法をのばして、ようやく最近、完成に近づいているのがわかるようになった。でもあの橋は、どういう種類の橋で、何という工法でやっているのだろう、などと現場でふと思ったりするが、看板が立っているわけでもないで知りようがない。要するに、土木は寡黙なのだ。

一方、私が仕事上でたまたま知り合った某医大教授は、それとは逆のよい例であった。先生は社会還元と称して、入ってきた原稿料の一部で必ず、新聞・出版の人たちに御馳走をされるという。マスコミの人間が御馳走をされたくらいでチョウチン記事を書くことは先ずないのであるが、そこはそれ、人情というものである。その先生が本を出されると、各新聞（主に地方紙であるが）こぞって書評にとりあげてくれる。これはいつも取材に協力して頂く御礼の意味もあろうが、自分では口を開かずとも寡黙でない好例である。

などと書くと、ははあ、お前も御馳走になりたいのか…などと思われる方はいないだろうが、本を書いたり、新聞社・出版社にはよく協力しろということか、といわれるだろう。だいたい、技術者には口数の少ない人が多く、ゴマすりの少々もできない人の方が多いものだ。しかし、上にのべた例のように、自分でしゃべりたてる必要もないのである。あるいは、周囲には文才のある方も必ず居られるはずであるから、そういう方を大事にされるのも一法であろう。ただ、私が残念に思うのは、たとえば通俗書（要するに一般大衆向けの本）を書いたりすると、ややもすると冷たい眼を向ける風潮がまだまだなきにしもあらずということだ。実力は実力、それ以外のことはそ



れ以外のこと、とどうして割り切れないのだろうか？

その点、「水のなんでも小事典」の発刊に際しては、幸いにも、私どもの期待以上の大きな御理解が土木学会関西支部より得られて、こんなに気持ちのよい仕事ができただのも珍しかった。聞くところによれば、土木工学というのは道路、空港、橋などにとどまらず、街づくり、国づくりの学問だという。これは大いに心づよいことである。私事で恐縮だが、私の豚児たちが成長した将来に、果たして彼らが独力で住む家の一軒も手に入れられるかどうか、甚だ心もとないというのが実感である。今さら東京周辺の地価をあげつらっても仕方がないが、結局“べらぼうな”事の多くは、東京へのあらゆる物事の“一極集中”が原因であろう。このことは誰もが知っていて、誰もよい手が打てないでもいる。とはいえ、一部の上層部の認識が甘いということも一因であろう。たまたま、土木学会誌を拝見していて、天野光三先生が一極集中について鋭い御意見を寄せられていたので、さすが…と思いつつ、拝読させて頂いた。恥ずかしい話であるが、都市づくりは建築家の仕事だとばかり、私は思っていた。たしか、著名な建築家の何人かが、その面でいろいろと発言されていたので、そう思いこんでいたのである。しゃ

べるが勝ち、といえなくもない。

さて、私自身は、特に土木工学に仲間意識はもってはいないが、私の住む街や国を好ましいものにしてくれる学問や仕事であるからには、ぜひとももっと発展してもらいたい、と思っている。いや、そう思うようになった、というべきだろう。一冊の本のえにしである。

関西支部では、さらに、「橋」についての面白い本を企画しておられるという。うんと面白い本ができて、私のようなニワカ土木ファンが一人でも増えることを期待したいものである。

橋は、人生において数々の思い出にまつわるものでもある。税金でつくる橋が多からうから、ぜいたくはできないと聞くけれども、思い出に残るような、“よい橋”を作りあげて頂きたいとも思う者だ。たとえば、橋といえば、日本人の誰もが挙げる岩国の錦帯橋のような…。

■平成2年度新役員一覧表

支 部 長	竹内 良夫 (関西国際空港)		
副 支 部 長	松下 照夫 (大林組)	吉川 和広 (京大)	
商 議 員	家村 浩和 (京大) 大越 洋 (ピー・エス・コンクリート) 清水 武久 (清水建設) 坪香 伸 (奈良県) 二十軒起夫 (奈良交通) 船越 洋一 (近畿地建) 山口 昇 (兵庫県) 飯田 邦夫 (阪神公団) 奥村 義雄 (大林組) 北村 泰寿 (神戸大) 佐藤 忠信 (京大) 塚本 勝典 (福井県) 藤平 勝 (パンフィックコンテナンツ) 吉田 健 (神戸市)	市川 裕一 (大阪市) 北小路光男 (京都府) 総田 完治 (松尾橋梁) 手塚 昌信 (関西電力) 平峯 悠 (大阪府) 三谷 巖 (五洋建設) 吉田 力 (滋賀県) 今宿 芳弘 (鴻池組) 片岡 真二 (第三港建) 小林 和夫 (阪工大) 竹内 修治 (酒井鉄工) 寺村 務 (大和設計) 森竹 淳 (西日本旅客鉄道)	江藤 剛治 (近畿大) 小林 絃士 (立命大) 多田 利雄 (舞鶴高専) 中辻 啓二 (阪大) 広石 忠 (和歌山県) 村上 脩二 (セントラルコンサルタン) 新井 洋一 (関西国際空港) 上田昭二三 (鉄建公団) 片山 貞夫 (京都市) 小林 治俊 (阪市大) 田中 利秋 (南海電鉄) 西田 寛 (京阪電鉄) 柳内 七郎 (住都公団)
評 議 員	天野 光三 (京大) 大塚幸太郎 (大阪市) 向井 文夫 (大阪府) 江見 晋 (阪神公団) 竹内 良夫 (関西国際空港) 藤井 崇弘 (兵庫県) 宮井 宏 (近畿地建)	飯塚 卓 (阪神電鉄) 西村 昂 (阪市大) 輪田 朝雄 (森本組) 大西 一行 (奥村組) 土屋 義人 (京大) 布施 洋一 (関西国際空港) 頼 千元 (大阪ガス)	梅原 利之 (西日本旅客鉄道) 堀川 勲 (高田機工) 井田 憲治 (神戸市) 白石 成人 (京大) 西田 一彦 (関西大) 松岡 昂昭 (建設技研)
副 会 長	近藤 信昭 (関西電力)		
理 事	足立 紀尚 (京大)	佐々木 伸 (大阪市)	津垣 昭夫 (鹿島建設)
監 事	長田 新平 (機動建設)		
次 期 会 長	岩佐 義朗 (京大)		
幹 事 長	足立 紀尚 (京大)		
幹 事	会田 武彦 (住友金属) 大石 富彦 (関西電力) 沖村 孝 (神戸大) 喜多 和人 (神戸市) 竹村 隆夫 (修成建設) 則武 通彦 (関西大) 細谷 千尋 (近畿地建) 宮川 豊章 (京大) 山本 修司 (関西国際空港)	阿部 信晴 (阪大) 大志 万和也 (阪神公団) 河田 恵昭 (京大) 菅原 正孝 (阪産大) 富永 克己 (熊谷組) 八田 吉弘 (オリエンタル建設) 真嶋 光保 (阪市大) 本久 明 (中央復建) 山本 正幸 (西日本旅客鉄道)	井上 俊廣 (兵庫県) 小川 哲治 (大阪府) 河手 禎男 (近鉄) 竹居 重男 (大阪市) 野坂 俊雄 (栗本鉄工) 羽田 勝実 (不動建設) 道廣 一利 (摂南大) 山内 英治 (大林組) 吉倉 敬治 (東亜建設)
特定事業幹事	<ul style="list-style-type: none"> ●学生会員海外派遣研修 ●コンクリート行事 ●高専学生対象行事 ●市民対象行事 ●一般書の刊行 ●技術継承 ●土木を考える 	青木 伸一 (阪大) 草川 弘 (奥村組) 多田 利雄 (舞鶴高専) 若林 拓史 (府立高専) 井田 康夫 (阪工大) 羽田 光江 (関西航測) 加茂 年彦 (和歌山県) 守田 諒介 (和歌山県) 川谷 充郎 (阪大) 岡 修一 (大林組) 橋本 徳昭 (関西電力) 嘉門 雅史 (京大) 井上 亮 (大阪市)	木村 亮 (京大) 小林 和夫 (阪工大) 堤下 隆司 (修成専門) イチノセ・ルイザ・ヒロコ (春本鐵工) 山田 菊子 (京大) 戸川 一夫 (和歌山高専) 中島 裕之 (阪神公団) 雪本 雄彦 (阪神公団)

■広報

- 表紙 高速湾岸線・中島パーキング付近(阪神高速道路公団 提供)
- 編集幹事 大石、竹居、則武、宮川、本久、山内

平成2年度支部事業スケジュール

	平成2年			平成3年	
	4～6月	7～9月	10～12月	1～3月	(未定行事等)
講演会	●総会講演 5/9 ●海外派遣報告会 5/14, 15, 18, 19, 21, 25 6/1, 6, 7 ●支部学講 6/5	●業務発表会 9/4 (建コン協)	●滋賀地方 11/9 ●土砂崩壊 11/9 (土砂崩壊懇談会)	●技術革新 1/18 ●施工技術 1/23	●3年学講 ●3年総会 ●高専学生
講習会	●熱・流体不安定現象 (機械学会) 5/23, 24 ●有限 (材料学会) I. 6/5, 6 II. 6/12, 13 ●産業用ロボット (機械学会) 6/6, 7	●CAEシステム (機械学会) 7/18, 19 ●鋼斜張橋 (鋼構造委員会) 9/27	●材料・工法 10/30, 31 ●地下空間 11/20, 21 ●環境創造 12/12		
研修会		●コンクリート構造 I. 8/23 II. 8/24			
研究・懇話会			●技術継承 10/25		
映画会	●学生映画会 5/14～6/14				●3年学生映画会
見学会	●第1回見学会 5/16				●第2回見学会
懇親会	●総会懇親会 5/9			●会員懇親会 1/18 ●支部懇談会	
シンポジウムほか	●異業種技術交流 (化学協会) 6/5, 6, 7				
座談会					
海外研修		●募集締切 9/29	●書類選考 10/11 ●研修生選考決定 11/11	●研修生認定証授与 1/18	
市民対象行事		●土木文化講座1. 8/7 ●関空見学会 8/22	●市民メイン行事 11/18 ●和歌山地方見学会 11/18 ●土木文化講座2. 11/11 ●土木文化講座3. 11/11		
一般書の刊行					●「橋」執筆・編集
情報サービス	●蔵書目録'90				●蔵書入力
刊行物	●行事案内 (第2回)	●行事案内 (第3回) ●支部だより37号 ●学生の声7月号 ●支部のページ8月号 ●シビルエンジニアリング '90関西地区特集の編集 ●行事案内 (第4回)	●行事案内 (第5回) ●支部だより38号	●行事案内 (第1回) ●学生の声2月号 ●支部のページ3月号	
主な会議	●商議員会 5/9 ●支部総会 5/9 ●本部総会 5/28 ●商議員会 6/22	●共研G代表者会議 7/23 ●班長会議 8/9	●商議員会 10/29	●支部連絡会 1/1 ●役員候補者選考委員打合せ 1/1 ●商議員会 2/1	
その他	●開票 4/6 ●会計監査 4/20 ●'1技術賞業績発表 5/9 ●'1共同研究Gワークショップ 5/19, 26 6/2, 5, 8 16, 22 ●共同研究G設置 6/22 ●技術賞選考委員選出 6/22	●技術賞選考委員会 7/23 ●'3全国大会特別会計発足 7/1 ●'3全国大会実行委員会 7/27	●全国大会 (新潟大) 9/30, 10/1, 2 ●会計監査	●技術賞予選 2/1 ●技術賞候補内定 3/1	



編集・発行
社団法人 土木学会関西支部
大阪市中央区船場中央2丁目1番4-409号
TEL.06-271-6686 FAX.06-271-6485

